

開催地名	長崎県南島原市
開催日時	令和8年2月15日(日) 10:00 ~ 11:30
開催場所	南島原市深江ふるさと伝承館
語り部	吉田 亮一(宮城県仙台市)
参加者	約100名
開催経緯	南島原市は島原半島南部の町が合併してできた市である。海沿いの場所であり、火砕流による被害は限定的であったため、地域の関心は地震やそれに伴う災害に向かっている。そうした実態に合わせ、東日本大震災直後の具体的な話を聞く機会を得ることは行政をはじめ地域にとっても有意義なことであると考え、今回のプロジェクトに参加することを決めた次第である。
内容	<p>日々の防災活動で災害に勝つー災害への危機感と想定以上の備えー</p> <p>(1)はじめに</p> <p>調べたことや研究したことではなく、すべて、私がこの身で経験し、体験したことだけを話したい。私はこれまで5度の地震災害を経験してきた。47年前の宮城県沖地震に始まり、東日本大震災、そして大阪北部地震。特に大阪のブロック塀倒壊事故は、私自身が事故の3年前に現場を訪れ、その危険性を指摘していた場所だった。残念ながら私の懸念は現実となり、女子児童が犠牲になってしまった。あの時の無念さは一生忘れることはできない。自然災害は地球が活着している証拠だ。地球が動いているからこそ、私たちはこの「生き物」といかに共に生きるかを考え、行動しなければならない。今日は「自分たちの地域を自分たちで守る」ための、絵に描いた餅ではない、本物の備えについて伝えたいと思う。</p> <p>(2)被災の記録：訓練が「中学生の行動」を変えた瞬間</p> <p>2011年3月11日、午後2時46分。仙台を襲った震度7の激しい揺れ。雪が舞い散る極寒の中、私の地域では驚くべき光景が繰り広げられた。地震発生からわずか1時間半後、学校にいた中学生8人が地域へ飛び出し、「避難所の準備ができました！皆さん避難してください！」と大声で呼びかけに回ったのである。震災の翌日は卒業式。本来なら生徒たちは混乱の中にいたはず。しかし、彼らは動いた。柔道の畳を敷き、誰が来てもいいように場所を整えた。これは、私たちが震災の5年前から「土曜の朝7時半」という過酷な設定で訓練を積み重ねてきた結果だった。大人が仕事でいなくなる平日の昼間、地域を守る「実働部隊」は、そこにいる子どもたちや先生、そして残された住民なのだという現実を彼ら自身が証明したのである。</p>

(3)事前の備え：想定を上回る「危機感」と「校区体制」

防災の基本は「自助・共助・公助」と言われるが、私はその前に「危機感」を置いている。危機感なき備えは機能しない。

- 「想定」は人間が作るもの

行政のハザードマップは目安に過ぎない。相手は自然。「震度5」と予報されても、自分の家が盛り土の上なら震度7の衝撃が来る。だからこそ、想定の一歩先、二歩先の備えを自ら行う必要があるのだ。

- 「校区」こそが防災の最小単位

自治会単位の「地区防災」だけでは限界がある。小学校区・中学校区全体を一つの運命共同体とし、保育園、病院、商店街、企業をすべて巻き込む「校区防災」を私は提唱している。これによって、個別の自治会では解決できない高齢化や役員不足の問題も、地域全体の力で解消できる。

- 名簿とマップの戦略的活用

私たちの地域では、要支援者名簿をA3版でラミネート加工して配布している。A4だと書類に紛れてしまうが、大判のA3なら存在感があり、下駄箱の上などに置いてもらえる。油性ペンでその日の状況を書き込み、訓練後には除光液で消して何度も使う。マップは「飾るもの」ではなく「使い倒すもの」。

(4)実践と継承：子どもを「お客さん」にしない避難所運営

避難所において子どもたちは守られるだけの存在ではない。

3.11の時、私たちの避難所の受付や物資管理、さらには17日間にわたる詳細な運営記録ノートを自発的に書き続けたのは、小中高生たちだった。

- 24時間体制のリアリティ

受付、衛生、警備、総務。これらをすべて地域住民で24時間回した。最年少は小学4年生。彼らは「自分たちに何か手伝わせてくれ」と志願してきた。大人が指示を出すのではなく、子どもたちが自ら役割を見つける環境を平時から作っておくことが重要である。

- 命を守る炊き出しのルール

	<p>炊き出しは「お腹を満たせばいい」のではない。アレルギー、腎臓病などの持病、宗教上の理由（ハラール）を考慮し、掲示板には必ずメニューと「すべての調味料・メーカー名」を明記する。これができないと、避難所で新たな健康被害を生むことになる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 枕元の「命を守る6点セット」</li> </ul> <p>非常持ち出し袋を玄関に置くのは間違っている。寝ている時に被災する確率を考え、枕元に「靴下、厚底スニーカー、ヘッドライト、防犯ブザー」を置いてほしい。特に防犯ブザーは重要である。笛は意識を失えば吹けないが、ブザーは紐を引けば電池が切れるまで大音量で鳴り続け、あなたの場所を救助者に知らせてくれる。</p> <p>(5)伝えたいこと</p> <p>最後に、地域の役員の皆様に問いかけたい。皆様の地区に眠っている繰越金や貯金は、何のためにあるのだろうか。私はリーダーになった時、「防災のために予算をくれ。命を守る機材を買う」と断判した。行政の補助金を待っていては、間に合わない。</p> <p>自分たちの金で、自分たちの命を守る無線機や機材を揃える。それが「自主防災」の本当の意味だと思う。「まさか」は必ず現実に起こる。今日、私が持ってきた、子どもたちが泥臭く書き残した大学ノートを見てほしい。そこには13枚のクラッカーを誰に配ったかまで、克明に記されている。この記録こそが、未来の命を守る最高の教科書。</p> <p>皆様の地域でも、今日から「校区」という大きな視点で、子どもたちを「助ける側」の主役に据えた備えを始めてほしい。</p> <div data-bbox="467 1458 919 1798" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="943 1469 1385 1798" data-label="Image"> </div>
開催地より	講演は事実を述べられており、ひじょうに具体的で聴衆にも分かりやすい内容であった。特に地域の高齢化は大きな課題であるが、そのことを解決するきつ

	かけにもなる内容で、今後の活動に大いに参考になる講演であった。今後も定期的に防災への取り組みを進め、意識を高めていきたいと考えている。
--	---